

特集 〈ゆるい〉

ゆるむ・ゆるい・ゆるやかな

阿部 靖子

我が家は自宅の中に事務所があるいわゆるSO
HO (Small Office Home Office) で、玄関を入
ると事務所になっています。カタログや資料の類
を納める本棚が壁一面の上部に作りつけてあり、
その下に複写機、プリンター、パソコンと机が並
んでいます。

ある日、本棚の中央で左右の繋ぎ目が一ミリ

メートル程開いているのに気付き、後で何とかし
ようと思いました。数日後、出先から帰宅する
と、蓋の外れたパソコンと複写機の上で本棚がモ
ビールのように宙に揺れています。慌てて本棚が
崩れ落ちないように左手で支え、右手でカタログ類
を一冊ずつ床に積み上げていき、右側の中身を全
て取り出したところで、残り左半分がバランスを

失って机の上に脱落してしまいました。一面に散乱した書類や本と壊れた本棚を片付けるのは一苦勞でした。

こうなった過程は、ビスで壁に固定してあった本棚の裏板が重みに耐え切れず一部破損。すると本棚が少しずり落ちて、左右の本棚を繋いでいた接合ボルトに本来かかるべき力の向きとは直角方向の力が加わって、ボルトが緩み接合部が開く。このとき異常に気付いたのに放置したのでさらにボルトが緩んで遂に外れてしまったのです。初めから締めが緩かったわけではありません。ボルトは時間の経過で緩むことがあるし、何より正しい力の向きに作用しなければ緩んでしまい、一度緩むとその後の崩壊は早いという身近な事件でした。

一方、斜路の勾配は普通緩いほうが好まれます。当然、長すぎない距離であれば急勾配よりも緩勾配のほうが上り下りしやすいからです。近年、ユニバーサルデザインという考え方が普及し

て、誰でも使えるデザインが求められるようになりました。そこで建築においてはバリアフリーの手法が一般の建物においてもとられるようになってきました。不義理などのために相手先を訪問しにくい場合『敷居が高い』と表現しますが、従来出入り口に段差は付き物で、敷居は高いものでした。それは建築の納まり（部材の取り合い）の都合ということもありますが、水や塵埃が敷地や建物内に入りやすくする工夫であり、さらには精神的な境界でもありました。

それが最近ではバリアフリーにするために段差を無くして階段状の部分には斜路を併設するようになってきました。前述のように通常建物の基準階は道路よりも少し高く計画します。道路から建物入り口までの距離が長ければ歩いても気付かないくらい緩い勾配がつけられますが、そうはできないこともあります。階段と斜路のどちらを歩くのが楽かは人によって異なります。車椅子使用者、

視力の弱い人、怪我人、パーキンソン病、高齢者、妊婦、幼児、あるいは健康な成人であっても大きな荷物を抱えていることもありますし、身体的には問題がなくとも習慣ということもあります。大事なことは『ここは平坦ではないので注意が必要だ』ということがはつきりとわかり、その上で、各人が使いやすいデザインがなされていることです。ただ緩勾配なら良いというわけではありません。

ある集合住宅では道路から入り口までの距離が七メートルあまりで床までは四十七センチメートル高く、三段の広い階段と幅一メートルの斜路が併設されていました。段差が十三センチメートルの階段はほとんどの人にとって苦にならないものですし、斜路の勾配は一般基準を満たしています。ところがその集合住宅の玄関前を観察すると、そこを通る人のほとんどが日常的に斜路を歩き、階段を歩くのは雨や雪が降って斜面が滑りやすいと

き、またはだれかとすれ違うとき、引越し業者が斜路を占有されているときでした。そこで、斜路の幅を広げ、床に滑りにくいタイル

を張り、手摺を設け、道路とアプローチ部分を遮っていた高い塀を低くして視界を広げました。

こうすることで、歩行者、前面道路を通る車の双方にとって安全になりました。

この数年都心部での大規模再開発・超高層建築ラッシュで自動回転扉が増しましたが、昨年六本木ヒルズで児童が自動回転扉に挟まれ圧死するという痛ましい事故がおき、その後、類似した事故は他にもあったことが明らかになりました。その結果、自動回転扉の撤去や改修工事が続いています。このニュースを聞いたときに「やはり」と思ったのは私だけではなかったでしょう。あれは



危険だと感じていた人は多いと思います。危険を察知すればそれを回避しようと思いますが、往々にして子どもや高齢者は危険を察知できなかったり、たとえ察知したとしても、それを回避する手段がなかったりするので、施設側では二重三重の安全措置を講じねばなりません。配慮の足りないことが重なる交通事故につながる可能性が高くなるのです。

六本木ヒルズについていえば、商業施設、美術館、ホテル、オフィス、住宅と用途の異なるいくつかの建物を集積させ、あたかも遊園地であるかのごとき宣伝で集客をねらいました。そのため精神的な境界であるところの『敷居』は一見したところ低く設定されたのです。大勢の人が来場できるよう、また入り口で混雑しないように、回転扉は大型になり、また大型であるがゆえに自動になりました。なおかつ回転速度が上げられ、誤作動で止まることの無いようにセンサーの感知範囲が

狭められました。皮肉なことにまさに大勢の人に來てもらおうとしたことが、事故の直接の原因となっていました。回転扉が接触を直ぐ感知して止まり戻る機構が働いていれば、また扉の隙間に体の一部が巻き込まれないようバリケードがあればこの事故は起きなかつたか、起きてもし死には至らなかつたかもしれません。製造者・建物の管理者の責任が問われるのは当然ですし、私たち建築に携わる者全てにとって、安全な建物を作るうえで心の戒めとすべき事件です。

冒頭の本棚脱落も回転扉の事故も、まさか自分の身に災難が降りかかろうとは思ひもしなかつた気持ちの緩みがあつたのでしょう。本棚の脱落事故を見た友人が「建築屋は人のことには一所懸命なのに自分のことはおろそかに考えがちだね。僕のところも大地震がきたら圧死するかもしれない」と言いました。私たちはいつも安全に注意を払っているつもりでも、たまたま気が緩んでいた

り、抜け落ちているところがあつたりと、完璧ではありえません。ですから、工事関係者、施設管理者、使用者の全てが再度安全に関する見直しを図り互いに率直な意見を交換し、『緩んだ螺子を締めなおす』必要があるのではないのでしょうか。

せかせかとしがちな現代生活の中で、ゆるやかな時間に身を任せる生活を楽しむためには、矛盾するようですが、締めるべきところは締め、緩めるべきところで緩める術が求められているように思います。
(アトリエ レッズ)

遊ぶ子供の声聞けば……

植木 朝子

平安時代末、京都の人々を魅了したのはやり歌があった。これまでの歌謡に比べて、目新しく華やかな魅力をもっていたために「今様いまさま」と呼ばれた

歌々である。今様を愛した時の権力者後白河院は、その詞章を集めて『梁塵秘抄りょうじんひしやう』を編んだ。この書名は次のような故事によっている。すなわ